自著紹介

『いづも財団叢書２　出雲大社の造営遷宮と地域社会　下』

（今井出版、2015年５月）

長谷川　博　史
（島根大学教育学部共生社会教育講座教授）

2013年５月に出雲大社（杵築大社）本殿遷座祭が執り行われたことは、まだ記憶に新しい。今回、60年ぶりに大屋根が葺き替えられた本殿と境内は、直接には1744年（延享元年）遷宮の「延享造営」時のものを引き継いでいるが、基本的な構造や様式は、1667年（寛文７年）に遷宮を終えた「寛文造営」によるものである。その姿は、あたかも太古の昔から連綿と続く古来の様式であるかのように思われているかもしれない。また近年では、2000年の発掘調査により鎌倉時代の本殿の柱が巨木３本を束ねた形状であったことが判明し、古代の本殿が超高層建築であったという伝承を裏づけるものではないかといった議論も、さかんに行われるようになった。

しかし、今から400年前の杵築大社は、そのようなイメージとはかけ離れた姿をしていた。

まず第一に、建物の規模・構造・意匠が全く違う。特に1580年（天正８年）遷宮の「天正造営」本殿は、高さが現在の半分近く（約13.5m）しかなく、1609年（慶長14年）遷宮の「慶長造営」本殿は高さ20m近くにまで回復するものの、それを支える９本の柱には黒光りする漆が塗られ、正面の最も目立つ部分に当たる妻壁に龍や雲水の彫刻が配置されるなど、装飾性の強い意匠が施されていた。境内の建物全般に華やかな朱の色が散りばめられており、白木造の現在の建物とは全く異なっていた。現在は、棟木を直接支える形で本殿の正面に直立する棟持柱が印象的であるが、当時の本殿にはそれもなかった。

さらに驚くべきことに、当時の境内には三重塔、鐘撞堂、経蔵など、たくさんの仏教建築物が林立していた。その三重塔は、兵庫県養父市の

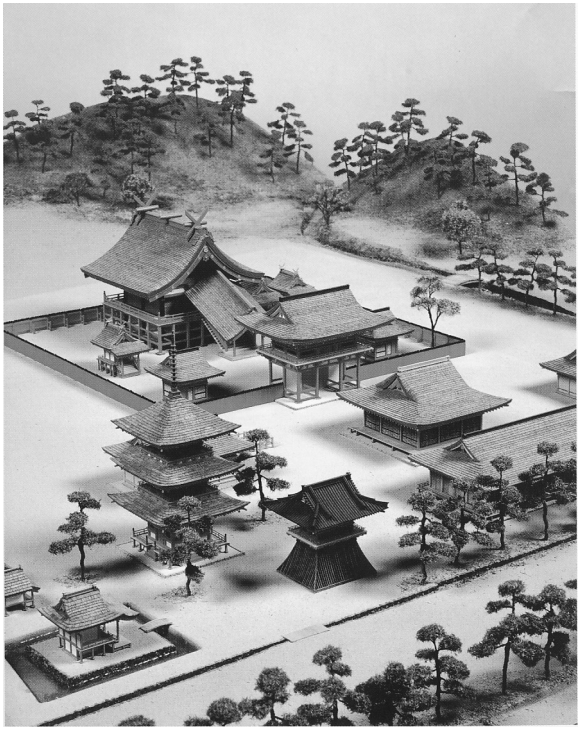
名草神社に移築されて現存しているが、繊細な姿形や朱の色合いが美しいだけではなく、高さは現在の大社本殿とほぼ同じであり、とても存在感のある建物である。従って、今から約400年前の杵築大社において、最も高く、最も遠くから望見できた建築物は、本殿ではなかったということになる。当時の境内の様子については、島根県立古代出雲歴史博物館に縮尺1/150の模型が常設展示されているように、いくつかの復元研究がすでに試みられてきている。

「慶長造営」の次の造営事業は、約60年後の「寛文造営」である。しかし、この２つの造営事業の間には、大きく根本的な違いが見られた。現在の境内・社殿につながる「寛文造営」は、「慶長造営」以前における境内・社殿の特徴の少なからざる部分を否定し、杵築大社の歴史を二分するような意味を持っている。「慶長造営」以前を杵築大社における「神仏習合時代」と称したり、「寛文造営」が杵築大社における「神仏分離」であると位置づけられたりしてきたのは、そのためである。そうした呼称の妥当性はひとまず措くとしても、スサノオからオオクニヌシへの祭神の転換（復帰）、大社本願や鰐淵寺をはじめとする仏教諸勢力の排除・隔離、本殿周辺からの仏教建築物の撤去、境内規模の大幅な拡大、華やかな装飾の一掃など、「寛文造営」の画期性はいくら挙げてもきりがないほどである。

地域社会に大きな影響をおよぼしてきた杵築大社の構造転換は、この地域の歴史を考えるためにも見逃せない。「寛文造営」が早くから注目されてきたのは、そのためである。ただし、その意味を明らかにするためには、「慶長造営」以前の実像がわからなくてはならない。とりわけ、本殿間近に多数の仏教建築物を建てたのは戦国大名尼子経久の仕業であり、戦国時代の実像こそが重要な手がかりとなるはずである。豊臣秀頼による「慶長造営」は、桃山文化の影響を受けた独特な社殿を生み出したが、同時に、戦国時代における境内の特徴をも色濃く引き継いでいた。しかし、残念ながら史料が限られているため、これまであまり注目されてはこなかったのである。

本書は、公益財団法人いづも財団編『いづも財団叢書』の２冊目にあたり、2013年度に出雲市大社町において行われた４回の公開講座とシンポジウムの内容を、まとめなおしたものである。筆者のほか、谷本進・山﨑裕二・西岡和彦・岡宏三・和田

嘉宥・廣澤將城各氏が、江戸時代以降の杵築大社造営遷宮事業について、最新の研究成果と史料によって解説している。そのなかで筆者に与えられた課題は、「慶長造営」の実像を明らかにすることであった。寄稿した「近世初期の杵築大社」は、最近新たに発見された史料を用いて、「慶長造営」境内の実像やその意義を総体的にとらえなおそうとしたものである。なお検討すべき課題も多いが、今後の研究の進展が大いに期待されるところである。



慶長造営出雲大社境内模型（島根県立古代出雲歴史博物館）